

「超ひも」シリーズの画家・紙田 彰 (かみた あきら)

“Super-string Theory” series

1951.5 洛陽にて出生 (1953 帰国)
2001. 5 病気 (大動脈解離) を機に油絵を始める (50 歳)
2001.10~2004 公募展活動
2003. 6~ 個展活動
(2007.3 現在, 55 歳)



〒1340087 東京都江戸川区清新町 1-1-22-105

Te1 03-3686-5915

akamita@naoe-ya.co.jp

www.naoe-ya.co.jp/ryokuji/ (全作品公開)

[画歴]

■個展

- <1st> 2003.6.2-7 "fragments", [銀座・小野画廊 II]
 - <2nd> 2003.9.22-27 "fragments, 2nd", [銀座・小野画廊 II]
 - <3rd> 2004.3.1-6 "Blotting Method"—水彩画の詩的実験 [小野画廊・京橋]
 - <4th> 2004.7.5-10 油絵小品展 "ANOTHER", [銀座・小野画廊]
 - <5th> 2004.11.7-13 油彩新作展 "自由とは何か", [銀座・小野画廊]
 - <6th> 2005.3.28-4.2 作品展 "What's Freedom?", [京橋 ギャラリー・小野]
 - <7th> 2005.4.25-30 作品展 "Super-string", [京橋 小野画廊 I]
 - <8th> 2005.6.20-7.1 油彩新作展 "Super-string, White Image", [京橋 小野画廊 I]
 - <9th> 2005.8.8-8.13 "Super-string Theory" 展, [京橋 小野画廊 I]
 - <10th> 2005.9.26-10.1 "6.5 メートルの油彩+α" 展, [京橋 ギャラリー・小野]
 - <11th> 2006.1.9-14 「解放衝動の発生」, [京橋 ギャラリー・小野]
 - <12th> 2006.4.24-29 「超ひも」シリーズの画家・紙田彰展 12th, [銀座・小野画廊 II]
 - <13th> 2006.5.29-6.3 量子レベルの解放衝動, [京橋・小野ギャラリー]
 - <14th> 2006.7.17-25 「 10^{-36} 秒」, [京橋・小野ギャラリー]
 - <15th> 2006.9.11-16 「超ひも」シリーズの画家「紙田彰 作品展」, [銀座・小野画廊]
 - <16th> 2006.12.11-16 「超ひも理論の思考イメージ」展, [京橋・小野ギャラリー]
 - <17th> 2007.1.8-13 「 10^{-44} sec. —重力の発生」展, [京橋・小野ギャラリー]
 - <18th> 2007.2.5-10 油彩大作展, [京橋・小野ギャラリー]
- 2006.10.1~11.30 横浜市 BankArt NYK 公開制作展
小野画廊主宰精鋭選抜展、袋小路の0号展、他

■コンクール

2003.12 第42回北陸中日美術展入選

■国際公募展

2001.10 欧州美術クラブ/第3回ドローイング・デッサン・版画コンクール入選

2001.11 第22回フィナール国際美術展入選

2002.4 欧州美術クラブ/第28回スペイン美術賞展入選

■国内公募展

2002.5 第47回新世紀美術協会展入選

2002.5 第37回たぶろう展入選

2002.6 第45回新象展入選

2002.10 第66回自由美術展入選

2003.6 第46回新象展入選

2003.10 第67回自由美術展入選

2004.6 第47回新象展入選

2004.10 第68回自由美術展入選

●JAZZ CLUB 新宿 PIT INN 展示(2004.11~05.8 月替り)

[制作コンセプト]

●特徴

麻ひも、棕櫚縄、タコ糸などをキャンバスに埋め込み、多量の油絵具で重ね塗りしながら、ニードルでのスクラッチング、サンドペーパーなどでの研ぎ出しなどを繰り返し、実在感のあるマチエールでの表現。マスキング部分の露出、キャンバスの折り込みによる木枠の露出なども。

●テーマ

この2年余りのテーマは、量子論と相対性理論をつなぐ「Super-string Theory(超ひも理論)」の思考イメージならびに抑圧と自由の問題。「人間とは何か、存在とはどういうことか、宇宙はどうなっているのか」を思索することにより、その思考イメージをキャンバスに表現している。

肉体の行為としての作品制作自体に重きを置き、それがマチエールの質感に現れることで、「実在」の問題の表現ともなるはずである。

作品創造の源泉とは行為の原初性(プリミティビティ)にあると考えているが、それはとりもなおさず、重なり続ける内部世界の解放衝動のことでもある。

また、WEB、展示、配布用パンフなどで同時に発表している宇宙論、量子論の考察、詩作品などの制作も、キャンバスを作り出す「場」に収斂されてきている。

ひもを多用するのは超ひも理論の即物的イメージということもあるが、スクラッチング、研ぎ出し、キャンバスの露出や折り込みなどは、平面の多層的な重なりという問題、現実を包み込むとか裏側に回り込むということはどういうことか、リーマン幾何学の曲率空間、次元の問題などとの関連がある。

物質と宇宙の問題が近い将来に明らかになる可能性が出てきているということは、大きな価値観、世界観の転回が近づいてきているということであり、そのことにアーティストとして鈍感であってはならないと考えている。

なお作品は、個展ごとに制作計画を立て、「超ひも」シリーズの個別テーマとして、大作、小品の作品群を制作し、インスタレーション風に精力的に発表している。(この2年で制作したシリーズ作品は100号以上の20枚余を入れて、100点以上)